

アウグスティヌスにおける歌唱の意義

三宅美々子

序

初期のキリスト教会はローマの異教文化と厳しく対立しており、ユダヤ教の音楽的遺産を引き継ぎながらも、音楽一般に対し極めて警戒的であった。だが、キリスト教が公認された4世紀には、典礼の規模が大型化するとともにそこにおける音楽（その中心は歌であった）の役割もますます重要なものとなっていた。アムブロシウスによる西方教会への讚美歌や交唱の導入等、典礼音楽に大きな発達がみられたこの時期、それに世俗の音楽や異教や異端の音楽とは異なる真にキリスト教的な音楽としての意義を与えることが、アウグスティヌス等当時の教父の仕事の一つであった。⁽¹⁾

I

教会音楽も世俗の音楽同様、耳の快楽の危険を伴う。専門的訓練を受けた独唱者による独唱、及び当時汎く行われていた独唱者が歌い会衆がリフレイン等でそれに応答する応唱（レスポンソリウム）形式の詩篇唱では、独唱者の美声と技巧が重視されがちであり、教会の歌が劇場の歌同然のものとなる危険は特に大きかった。⁽²⁾

アウグスティヌスは、『告白』Ⅹ巻33章でこの問題をとり上げ、アタナシウスに帰せられる一つの極端な解決策を示す。それは、「詩篇の朗誦者に声の抑揚を小さくさせ、歌うというより朗読するというのに近いようにさせる」ことであつた。⁽³⁾ アウグスティヌス自身、そのようなやり方が「より安全に思われることもある」と述べる。

実際、彼は「それら音の響きを生氣づけるのは汝の御言であり」、「その意味内容によってそれら音の響きは生かされている」として、音響（sonus）に対する歌詞の意味内容（sententia）の優位を主張する。そして、「歌われる内容（res）によってよ

りも歌 (cantus) そのものによってより動かされるといふことが起るならば、自分は罪を犯すのであり、その場合は歌うのを聞かない方がよかつたのだ⁽⁵⁾と述べる。だが困ったことに、「肉のよろこびは屢々人を欺き、……知らぬ間に罪を犯して以後でそれに気付く⁽⁶⁾」ということになるのである。そこで、時には耳の快樂による罪の危険を警戒するあまり、「詩篇の甘美な旋律を自分の耳から、また教会の耳から一切遠去けよう⁽⁷⁾とさえ思う」のである。

だが、アウグスティヌスは実際には常に教会の音楽に対し受容的であつた。彼自身、そのような厳格な考えは、「警戒の度がすぎた誤り⁽⁸⁾」であると認めており、歌が与える「快樂の危険と救済的效果の経験との間で揺れ動きつつ⁽⁹⁾」、しかし「どちらかという⁽¹⁰⁾と教会における歌唱の習慣を是認する方にひかされている」と述べるのである。

だが、歌唱是認の理由として彼があげる救済的效果とは、歌の音響に対する歌詞の意味の優位に基づくものである。即ち、彼は「歌われた場合の方が歌われぬ場合よりも、我々の精神は敬虔の炎の中へと、その聖なる詞自体によってより信心深くより熱烈に動かされるのを感じる⁽¹¹⁾」として、結局は「歌ではなく歌われる内容に動かされる⁽¹²⁾」という点に、「歌唱の習慣の大きな有用性を認める」のである。

歌の旋律の響きが耳に与える感覺的よろこびは、「それを介して未だ弱い精神が敬虔の感情の内へと身を起していくべき⁽¹³⁾」手段なのであつて、それ自体として愛されるべきものではない。それは、歌詞の意味内容が精神を動かすのを助ける有効な補助手段である限りにおいて、是認されるのである。

II

アウグスティヌスは、彼自身が「信仰を取戻した初めの頃教会の歌を聞いて流した涙を想起して⁽¹⁴⁾」歌唱の習慣を是認しようとする。『告白』Ⅸ巻7章によれば、当時彼はミラノの教会で「東方の流儀で歌われる」詩篇や讚美歌を聞いて落涙したのであつた。会衆が二手にわかれて交互に歌う交唱 (アンティフォン) 形式の詩篇唱や、やはり会衆自身が歌うのに適した単純で平易な旋律をもつ讚美歌は、ミラノのアムブロシウスにより西方教会に導入され、急速に各地にひろまっていた。独唱者中心ではなく会衆自身によって歌われるこの歌唱法においては、歌は単に耳で聞く

対象ではなく、歌うという主体的な行為、それも選ばれた独唱者の行為ではなく全てのキリスト教徒が為すべき行為として捉えられることになる。

歌を人間の行為としての歌たらしめるのは、耳に聴こえる音を出すことではない。In Ps. 18 に述べられるように、オウムのような鳥も人間に仕込まれて歌の響きを音として出す。「我々は鳥の声ではなく人間の理性で歌うために」、何が歌われるのかを理解しなければならぬ⁽¹⁵⁾。

だが、歌詞を単に知的に理解するだけでは、キリスト教徒の歌唱としては不十分である。誰でも人間として歌う限りは、「歌う内容を知らずにいることはできない」のであり、それ故に、よからぬ内容を歌う者は、「その内容を知らずにいることができないだけに一層悪い⁽¹⁶⁾」ことになる。何を歌うかが問題である。キリスト教徒は、聖書の詞や神を讃える讃美歌を歌うのである。そして、「自分達が声を合わせて歌った」その詞の意味内容を「曇りない心で知りかつ眺めねばならぬ⁽¹⁷⁾」。単に表面的な意味の理解ではない。歌う主体の核心としての心 (cor) 自体がその歌の内容に向けられ、そしてその際心の浄化が果たされていることが必要なのである。

即ち重要なのは、歌い手の心が何に向けられているか、その欲求或は愛のあり方である。In Ps. 95, 1 においては、肉の欲望が歌うのは「旧き歌」であり、神への愛が歌うのは「新しき歌」であるとして、その「新しき歌を神に向かって歌え」と述べられる。それは、神を讃える「新しき歌」の歌詞をただ音として口に響かせることではない。舌が神を讃美していても、その意識が、その生き方が神を冒瀆するものであるなら、何にもならない。それよりはむしろ、口では沈黙しているが、心で神を愛しているという方がまさっている。「その愛自体が神へと向う声であり、その愛自体が“新しき歌”なのである⁽¹⁸⁾」。その歌は人の耳には聞こえないが、神の耳には届く。人の耳よりも神の耳をよろこばせるように、口ではなく心で神を愛し讃えること、「舌先ではなくその生き方でもって歌うこと⁽¹⁹⁾」、これが全てのキリスト教徒がなすべき歌唱のあり方と考えられるのである。

歌唱は二様の意味で全キリスト教徒の業とされる。一つは、キリスト教徒全員が声と心を合わせて歌わなければならない、即ち各地の民が平和の内になる神を讃美しなければならないということである⁽²⁰⁾。もう一つは、キリスト教徒は全て、いついかなる時にあっても歌わねばならない、順境にあっても逆境にあっても常に神を

讚美しなければならない、舌や声だけでなく、その意識でもその生でもその行為でも、即ち自己の全てでもって神を讚えねばならないということである。⁽²¹⁾「心のけがれなさは睡眠中でも魂の声である」⁽²²⁾。従って、「声で歌う場合は時々沈黙することがあろうが、生では休みなく歌わねばならない。……心で沈黙することは、単に讚美を休むというだけでなく、神を冒瀆することになる」⁽²³⁾のである。

心における神讚美の歌は、声による歌唱の業を伴うとは限らないが、その時々には神への愛をもって為される様々の身体的な業を伴う。この身体の業は、歌に合わせて手が奏でる琴の伴奏に喩えられる。身体の業を為す者は手に琴 (psalterium) をもつが、心に愛がなければ歌えない。愛があってはじめて、琴の伴奏による琴歌 (psalmus)⁽²⁴⁾ が歌われる。詩篇 (Psalmus) とは琴に合わせて歌う歌に他ならない。アウグスティヌスは、身体に対する心の優位を伴奏に対する歌唱の優位に喩えつつ、詩篇を歌う者が心と業とで神を讚美すべきことを強調する。

声による歌唱は、神への愛の歌唱に伴われる善き行為の一つとして、耳を通して人に励ましを与えるために行われるべきものなのである。⁽²⁶⁾

以上のようにアウグスティヌスは、(Ⅰ)感覚より理性が大切であるから、歌の生命は歌詞の意味内容であるとして、また(Ⅱ)歌は人間の行為であるから、そこでは歌う主体の愛が重要であるとして、歌唱の脱音響性を主張する。

だが、歌を朗読ではなく歌たらしめているのは、歌詞ではなく旋律である。また、人間の様々な行為の中で、特に声で歌うことが神の讚美と関りが深いということであれば、心と業による神讚美の全てが「歌」と呼ばれることもないであろう。耳に聴こえる歌声は、詞の働きを強める補助手段にすぎないのであろうか。或はそれは、心における神讚美に伴う様々の身体的業の中の一つにすぎないのであろうか。音響的な歌唱がもつ意義が再検討されねばならない。

III

確かに、感覚に対する理性の優位ということからは、歌声の与える感覚的快に対する歌詞の意味の優位が主張される。それは、雄弁における *delectare* や *mouere* に対する *docere* の優位と類比的に考えられる。⁽²⁷⁾ *De doctrina christiana* Ⅳ巻12章に

述べられるように、語る内容 (res) を教えることは、語り方 (modus) によってよろこばせたり心を動かしたりすることに優先する。即ち、内容が教えられ理解されたならば、その内容自体が聴手による喜びを与え、その心を動かすこともあるのであり、その場合は更に雄弁の力は必要ない。その語られ方自体も気に入るのでなければ、そこに語られる真実を聴手がよろこばないという場合、或は何をなすべきか既に承知しておりながら、うながされなければそれを実行しないという場合、このような場合は、そしてこのような場合にのみ、更に雄弁の力を用いることが必要となる。よろこびを与え心を動かすという雄弁の力は、何であれそこに教えられた内容へと聴手をひきつけ同意させるものであり、それ自体として特定の内容へと聴手を向わせることはしない。先ず内容が教えられていなければならないのである。

同様に、歌唱においても、感覚的快は人間をその中に巻き込み、その下に縛りつけようとするものであり、それ自体としてはそれを越えるものへと人間を方向づけていく力をもたない。⁽²⁸⁾ 理性が感覚の先に立って導く場合には、そしてその場合にのみ、それは詞が精神を方向づけていくのを助け得る。特に、感覚的快楽も同時に与えられるのでなければ歌の詞へとひきつけられることもない、従って詞によって導かれることもできない未だ弱い精神にとっては、歌声の甘美さは確かに有用なものとなりうるのである。

だが、歌声は感覚的快楽を与えるだけではなく、歌声には何かそれ自体として或る特定の感情をかき立てる力があることをアウグスティヌスは認めていた。「我々の魂が抱く全ての感情は、その多様性に応じ、声や歌の中にそれぞれ固有のあり方をもっており、声や歌との何かしら或る隠れた親近性によって駆り立てられると感⁽²⁹⁾じられる」のである。

詩篇や讃美歌が歌われる場合には、我々の精神は歌の詞の意味内容によって敬虔の炎の中へと動かされる。だが同時に、敬虔の感情はその歌声自体によっても駆り立てられている。だからこそ、「そのように歌われた時の方が、聖なる詞自体によってより敬虔により熱烈に動かされると感⁽³⁰⁾じられる」のである。

感覚的快楽の下に縛られている者の精神を敬虔の感情へと向けて起き上らせる力を、歌声自体がもつのであれば、その歌声の感覚的な甘美さも小さからぬ意義をもち得ることになる。歌声の甘美さは、敬虔の感情を惹起こすその歌声自体へと聴手

をひきつける手段、それも極めて直接的で有効な手段なのである。

教会の歌唱がもつ意義は、人間の雄弁一般というより、「神的な雄弁」としての聖書の語り方、特にその象徴的な表現がもつ意義に通じるところがある。即ち、人間の言説一般においては、いかに語るかと何を語るかは別であるが、聖書においては、身近な物体の象徴を数多く用いて誰もが近づき易いものとなっていながら、⁽³¹⁾「たかぶる者には開かれず未熟な者には顕わにされぬ」その語り方は、そこに語られる内容としての神の救済の業のあり方と不可分の関係にある。聖書はそれ自体としては究極のものではなく、人を神へと導く手段にすぎないのではあるが、神から可死的な人間に特に与えられた神与の詞として、時間的な世界が続く限りかけがえのない手段であり続ける。⁽³²⁾同様に、人間の歌一般においては歌声と歌詞の意味内容とは直接関係がないが、詩篇や讚美歌の歌唱においては、歌声と歌われる内容との間には（感覚的快樂の危険という点から両者の区別がいかに強調されようとも）、或る隠れた関係がある。そして、教会においてそのような歌唱が行われるべきことについては、聖書において「主御自身による、また使徒達による証言や範例や命令が与えられている」⁽³³⁾。教会での歌唱もまた、神により定められたかけがえのない救いの手段なのである。

アウグスティヌスは、聖書の語り方と教会の歌声とを同じ用語を用いて論じている。即ち、それらは共にその意味内容を尊重しようとする者にとっては「救いのためになる」どころか「危険」であるが、⁽³⁴⁾しかし未だ感覚的肉的な「弱い者」に「よろこび (oblectamentum)」⁽³⁵⁾を与えてより高い所へ導く一方、既に信仰や理解が進んだ者にも「なぐさめ」「はげまし」⁽³⁶⁾を与え得るのである。

注目すべきは、聖書の象徴的な表現が弱い者の眼差しを「一步一步」「段階的に」⁽³⁷⁾導くのに対し、耳を介した歌声の働きはより直接的であるという点である。アウグスティヌスは、自分が回心後まもなく甘美な讚美歌の声を聞いて動かされた経験⁽³⁸⁾を次のように述べている。「それらの声が耳の内に流れ込むと、真理が心の中にしみとおってきた」⁽³⁸⁾。彼はそれを自己の経験としてしか語り得ないのであるが、⁽³⁹⁾歌声は真理を詞だけによるよりも明瞭でより純粹な仕方⁽³⁹⁾で伝え得るのである。

実際、歌唱は神を讚美する様々な身体的業の中で、人間にとって特に大きな意義をもつ。アウグスティヌスは、ミラノの教会で交唱が始められた事情を次のように

述べる。ミラノの教会が迫害をうけた時、「敬虔な民はあなたの僕である司教と共に、死を覚悟して教会に夜を過ごしていた。……その時、讚美歌や詩篇が東方の流儀に従って歌われるように定められた。それは、民が苦難に耐え切れなくなって意気阻喪することのないためであった」⁽⁴⁰⁾。神への愛のために死を覚悟した苦難の夜、その苦難に耐え抜き神への愛を貫くための慰めや励しとして、歌唱が行われたのである。苦難に直面した者にとり、歌唱は他の行為にまさって大きな意義をもつ。特にそれが神への愛の歌であるなら、苦しみをただ紛らわすのではなく、苦しみを耐え抜きのり越える力を与え得る。

人間は常に死へと傾く存在であり、此世の生は苦難に満ちている、特に自らの愛の *finis* を此世におかぬ者にとっては、此世の生は苦難に満ちた旅路であると考えられるのであれば、歌唱は全ての死すべき人間にとり、とりわけ神を愛する者にとり、極めて大きな意義をもつことになるのである。

IV

歌の詞が歌われる場合、アウグスティヌスは、このように大きな力をもつ歌声をもあくまで歌詞を補助するものとして位置づける。だが、アレルヤの最後の母音を引きのばして歌う長大なメリスマであり、殆ど歌詞なき歌唱といってよい *jubilatio* に関しては、歌声のより積極的な意義付けがなされることになる。

「*jubilatio* とは何か。言葉では表わせない喜びの讚嘆に他ならない」⁽⁴¹⁾。*jubilare* とは何か。「喜びを言葉では表わすことができず、声によって……それを証示することである」⁽⁴²⁾。それは言葉の限界故に用いられる第二の手段であるのか。そうではない。「神の喜ぶことを言葉で言い表すことができる」といもいうように、言葉を探してはならない。*jubilatio* で歌え。*jubilatio* で歌うことが、神に向い見事に歌うこと⁽⁴³⁾なのである」。

実際、人は「歌の詞を歌っていて喜びで心が躍動し始めると、詞では表せないほどの喜びに満たされたかのように、詞のシラブルには背を向け、*jubilatio* の響きの中に入って行く。…この *jubilatio* は、言い表すことのできぬ神以外の誰にふさわしいというのか。……神を言い表すことができず、しかも黙してはならないのであれば、*jubilare* する以外に何が残されていよう」⁽⁴⁴⁾。*jubilatio* は神の讚美にこそふさわ

しい歌い方であり、その歌声には詞以上の意義が与えられるのである。

だが、可聴的な音響或はその像を伴う人間の歌唱は、未だ完全な *jubilatio* ではない。⁽⁴⁵⁾ 人間の歌声は感覚的な喜びを伴うが、各人がそれぞれ神以外のものを喜び、⁽⁴⁶⁾ 詞を欠いた喜びの声を上げるとすれば、それは *jubilare* ではなく、ただ自分勝手に詞の枠を踏み越えて「吠え叫ぶ (*ululare*)」⁽⁴⁷⁾ ことになってしまう。人間の *jubilatio* は未だ不完全であり、神のみを喜びとして神への愛の内に完全に安らう者の喜びの歌ではない。

完全な *jubilatio* は天上のものである。それを内的な耳によって聴き得た者は、その何かしら甘美な歌声に導かれて、肉や血のざわめきの世界から離脱することができる。⁽⁴⁸⁾ 人間は未だ途上にあり、天上の歌声に導かれて完全な喜びの内に既に実際に到達しているわけではなく、そこへと到る希望の内に歌い、それによって旅路の⁽⁴⁹⁾ 労苦を慰めつつ歩み続けるのである。

「歌唱自体が告白である」⁽⁵⁰⁾。完全な神讚美という意味の告白ではなく、自らの罪を自ら告発することを介した神讚美という意味での告白が、人間の歌である。時間的世界の内にある人間は、自己及び自己に関わる事象が永続しない被造物であることを認めて、個々の事象に執着しようとする欲望の傾きから自己を引き離しつつ諸々の事象の間を廻り歩くことにおいて、被造物の美しさの中に創造者たる永遠の神を讚える言い表し難い *jubilatio* の捧げ物を見出していく。⁽⁵¹⁾ 可聴的な声音による歌唱においても、個々の音の感覚的甘美さへの執着の傾きを自ら断ち切ることによって、却ってそれらの音の甘美さを介しての神讚美が行われるのである。

アウグスティヌスは、詞の音節を離れ肉や血のざわめきを離れた純粹な歌唱に、完全な神讚美としての意義を与えるとともに、地上における人間の歌唱を、それが神を讚えるものである限り、天上の完全な喜びの歌へと人を導くものとして意義づけるのである。

註

- (1) 教父と音楽については、T. Gérold : *Les pères de l'église et la musique*, Strasbourg, 1931 ; Genève, 1973. H. Abert : *Die Musikanschauung des Mittelalters und ihre Grundlagen*, 1905, 1964. 参照。

- (2) Cf. Hieronymus : *Comm. in epist. ad Ephes.* III, 5, 19.
- (3) *Conf.* X, 33, 50 : tam modico flexu uocis faciebat sonare lectorem psalmi, ut pronuntianti uicinior esset quam canenti.
- (4) *Ibid.* 49 : in sonis, quos animant eloquia tua ; ipsis sententiis quibus uiuunt.
- (5) *Ibid.* 50 : Tamen cum mihi accidit, ut me amplius cantus quam res, quae canitur, moueat, poenaliter me peccare confiteor et tunc mallem non audire cantantem.
- (6) *Ibid.* 49 : delectatio carnis meae ... saepe me fallit ... Ita in his pecco non sentiens et postea sentio.
- (7) *Ibid.* 50 : ut melos omne cantilenarum suauium, quibus Dauidicum psalterium frequentatur, ab auribus meis remoueri uelim atque ipsius ecclesiae.
- (8) Cf. E. Van der Meer : *Augustine the Bishop*, London, 1978, pp. 325—337.
- (9) *Conf.* X, 33, 50 : immoderatus cauens erro nimia seueritate.
- (10) *Ibid.* 50 : Ita fluctuo inter periculum uoluptatis et experimentum salubritatis magisque adducor non quidem inretractabilem sententiam profrens cantandi consuetudinem approbare in ecclesia.
- (11) *Ibid.* 49 : *ipsis sanctis dictis* religiosius et ardentius sentio moueri animos nostros in flammam pietatis, cum ita cantantur, quam si non ita cantarentur.
- (12) *Ibid.* 50 : nunc ipsum cum moueor non cantu, sed rebus quae cantantur, ..., magnam instituti huius utilitatem rursus agnosco.
- (13) *Ibid.* 50 : ut per oblectamenta aurium infirmior animus in affectum pietatis adsurgat.
- (14) *Ibid.* 50.
- (15) *In Ps.* 18, 2, 1 : quid hoc sit intellegere debemus, ut humana ratione, non quasi auium uoce cantemus.
- (16) *Ibid.* : Eo enim peiores sunt, quo non possunt ignorare quod cantant.
- (17) *Ibid.* : quod consona uoce cantauimus, sereno etiam corde nosse ac uidere debemus.
- (18) *Ibid.* 95, 2: dilectio ipsa uox est ad Deum, et ipsa dilectio canticum nouum est.
- (19) *Ibid.* 32, 2, s. 1, 8 : cantet canticum nouum, non lingua sed uita.

- (20) *Ibid.* 54, 25 : cantet in unitate cum toto mundo ; *Ibid.* 65, 2 ; 97, 1 ; 149, 7 etc.
- (21) *Ibid.* 148, 2 : laudate de totis uobis ; id est, ut non sola lingua et uox uestra laudet Deum, sed et conscientia uestra, uita uestra, facta uestra.
- (22) *Ibid.* 102, 2 : Innocentia tua etiam in dormiente uox est animae tuae.
- (23) *Ibid.* 146, 2 : Cum ergo uoce cantaueris, silebis aliquando : uita sic canta, ut numquam sileas siluisti a laude Dei ; et quod grauius est, non solum a laude siluisti, sed in blasphemiam perrexisti.
- (24) *Ibid.* 143, 16 : qui non habent caritatem, portare psalterium possunt, cantare non possunt.
- (25) *Ibid.* 146, 2 : Psalmus quippe, cantus est, non quilibet, sed ad psalterium.
- (26) *Ibid.* : ad aurium exhortationem canta uoce.
- (27) U. Duchrow : *Sprachverständnis und biblisches Hören bei Augustin*, Tübingen, 1965, S. 226.
- (28) *Conf.* X, 33, 49 : Voluptates aurium tenacius me implicauerant et subiugauerant.
- (29) *Ibid.* : omnes affectus spiritus nostri pro sui diuersitate habere proprios modos in uoce atque cantu, quorum nescio qua occulta familiaritate excitentur.
- (30) *Ibid.* : ipsis sanctis dictis religiosius et ardentius *sentio* moueri.
- (31) *Ibid.* III, 5, 9.
- (32) *Ibid.* XIII, 15, 18.
- (33) *Epist.* 55, 18, 34. Cf. *Matth.* 26, 30 ; *Ephes.* 5, 19.
- (34) 聖書 *In Ps.* 48, s. 1, 1. 歌声 *Conf.* X, 33, 50.
- (35) 聖書 *De Trin.* I, 1, 2. 歌声 *Conf.* X, 33, 50.
- (36) 聖書 *Conf.* XIII, 20, 27 ; 21, 29. 歌声 *Ibid.* IX, 7, 15.
- (37) *De Trin.* I, 1, 2.
- (38) *Conf.* IX, 6, 14 : Voces illae influebant auribus meis et eliquabatur ueritas in cor meum.
- (39) Cf. C. J. Perl : Augustinus und die Musik, *AM* 3, 1955, S. 439-452, S. 449.
- (40) *Conf.* IX, 7, 15 : Excubabat pia plebs in ecclesia, mori parata cum episcopo suo.....tunc hymni et psalmi ut canerentur secundum morem orientalium partium, ne populus moeroris taedio contabesceret, institutum

est.

- (41) *In Ps.* 46, 7 : Quid est iubilatio, nisi admiratio gaudii, quae uerbis non potest explicari ?
- (42) *Ibid.* 94, 3 : Gaudium uerbis non posse explicare, et tamen uoce testari quod intus conceptum est et uerbis explicari non potest : hoc est iubilare.
- (43) *Ibid.* 32, 2. s. 1, 8 : noli quaerere uerba, quasi explicare possis unde Deus delectatur. In iubilatione canere. Hoc est enim bene canere Deo, in iubilatione cantare.
- (44) *Ibid.* : illi qui cantant.....cum coeperint in uerbis canticorum exsultare laetitia, ueluti impleti tanta laetitia, ut eam uerbis explicare non possint, auertunt se a syllabis uerborum, et eunt in sonum iubilationis Et quem decet ista iubilatio, nisi ineffabilem Deum ?..... si eum dari non potes, et tacere non debes, quid restat nisi ut iubiles..... ?
- (45) *Ibid.* 99, 8-11.
- (46) *Ibid.* 99, 6 : noli iubilationem tuam in alias atque alias res diuidere.
- (47) *Ibid.* 65, 2 : quicumque partem tenet, et a toto praecisus est, ululare uult, non iubilare.
- (48) *Ibid.* 41, 9 : audito quodam interiore sono, ductus dulcedine, sequens quod sonabat, abstrahens se ab omni strepitu carnis et sanguinis.
- (49) *Sermo*, 256, 3 : hic in spe, ibi in re ; hic in uia, illic in patria. Modo ergo.....cantemus, non ad delectationem quietis, sed ad solatium laborislaborem consolare cantando, pigritiam noli amare : canta, et ambula.
- (50) *In Ps.* 66, 6 : Ipsa cantatio confessio est ; confessio peccatorum tuorum et uirtutis Dei.
- (51) *Ibid.* 26, 2, 12 : Circumiui, et immolau.....hostiam iubilationis ;..... si circumeas uniuersa, consideratio concipit artificis laudem.....undique tibi omnia resonant conditorem, et ipsae species creaturarum, uoces sunt quaedam creatorem laudantium.